

タラコ唇

本物

春日信彦



目次

タラコ唇	1
------------	---

タラコ唇

1

不吉な妄想

6月2日（火）横浜開港記念日。真人（マヒト）は、今日もぼんやりとパソコンを前にして妄想にふけていた。4月7日（火）新型コロナ感染拡大防止のための緊急事態宣言が発令され、学生は通学できず、さらに、バイトもできなくなった。春に、福岡県の片田舎糸島市に行く予定にしていたが、実現しそうになかった。3月からは、マンションの小さな一室に引きこもり、意味のない妄想にふける毎日を送らざるを得なかった。妄想はとりとめもなく、気まぐれで、多肢にわたり、突然、脳裏に現れる幻想のようなものだった。コーヒーを一口すすった時、何かにおびえているようなブルブルと震えるタラコ唇の亡霊が脳裏に現れた。

令和元年8月、鳥羽君からタケルが、福岡市に引っ越したとの連絡を受け、10月に姫島を訪れた。近衛（このえ）宅の隣のおばあさんが言うには、一家は、近所にも挨拶せず、突然、引っ越したとのことだった。念のために、波多江（はたえ）先生に確認してみるとやはり、家庭の事情で福岡市に引っ越したとのこと。また、引っ越し先の住所は、後日連絡するとのことだったが、今だ連絡はないとのこと。タケルは、東京から引っ越してきて、突然、福岡市に引っ越してしまったわけだ。身の危険を感じて、雲隠れしたのではないかと思うと無事であることを願うしかなかった。タケルが天皇の子孫にあたるかは、全く、検証するすべはなかったが、草薙剣（クサナギノツルギ）を授けられたという噂からして、タケルは南朝天皇の血を引いているに違いないと直感した。

糸島に行ったついでに、3度目になるのだが、二丈唐原（にじょうとうばる）にある平家の落人（おちうど）の里に行ってみた。そこには、平重盛（たいらのしげもり）の内室と千姫と福姫のお墓がある。この場所も、何かが引っかかって、頭から離れなかった。平家は、源氏の追ってから逃れるように全国各地に逃げていったわけだが、追ってから逃げきれず多くの落人は殺されたに違いない。でも、落人の中には、運よく生き延びたものもかなりいただろう。特に、婦女子は、生き延びたいと考えたい。源氏は、平家を根絶やしにしようと九州の山奥まで追いかけて、平家の武士を殺害したに違いないと思われるが、婦女子まで殺害したとは考えられない。特に、幼い姫たちを殺害したとは、考

えたくない。

2

平治の乱（へいじのらん）の時、池禪尼（いけのぜんに）の命乞いがあったにせよ、13歳の源頼朝（みなもとのよりとも）は伊豆国（いずのくに）に配流になったものの命は助けられている。そのことからしても、武士の権力闘争とは無縁の幼い姫たちの殺害は考えられない。思うに、追ってきた源氏の武士たちは、姫たちの髪を切り、農民たちが着る粗末な服に着せ替え、これらの女子は農民に過ぎない、と解き放ったのではなかろうか？ かなり無理のある想像に過ぎないが、美緒の話によると、糸島には美人が多いという。ならば、美人遺伝子はどこから来たのか？ 思うに、千姫と福姫の遺伝子によるものではないだろうか？ 妄想が暴走しているようだが、意外と当たっているような気がしてならない。

姫たちの妄想がはじけると、突然、幼い安徳天皇（あんとくてんのう）の入水の姿が現れた。そして、安徳天皇は、本当に、入水したのだろうか？ という疑問がわいてきた。通説では、壇ノ浦（だんのうら）でおばあちゃんである平時子（たいらのときこ）とともに海底の極楽浄土に行ったことになっているが、これは、あくまでもお話であって、安徳天皇の遺体が都に運ばれたという記述はどこにもない。ならば、仮に、入水したとしても、救出されたとも考えられる。草薙剣が海底から引き揚げられてはいないということから考えて、実は、草薙剣は海底には沈んでいないと考えていいのではないか？ 安徳天皇は、草薙剣を携えて生き延びたのではなかろうか？

生存説には諸説あるみたいだが、思うに、避難場所は、赤間神宮（あかまじんぐう）がある山口県か？ 千姫と福姫のがいた糸島ではなかろうか？ ①山口県説だが、赤間神宮は安徳天皇を祀っているというが、どうも腑に落ちない。思うに、これは安徳天皇の生存のカモフラージュではなかろうか？ そして、平家一門は、安徳天皇の子孫を天皇としているのではなかろうか？ ②糸島説だが、糸島にしか存在しない波多江一族も平家一門と思われるが、もしかしたら、安徳天皇を密かにかくまっていたのではないか？ というのは、古事記によれば、確か、第8代孝元天皇の孫にあたる建内宿禰（たけのうちのすくね）の長男は、波多八代宿禰（はたのやしろのすくね）だ。”波多”が共通しているのではないか。その縁もあって、タケルは、運命的に、姫島分校の波多江先生と出会ったのではないか？ もしかしたら、追跡をかわすために、タケルは波多江家の養子になり、波

多江の姓を名乗っている可能性もある。そして、糸島のどこかに潜んでいるのではないか？ 頭が少し変になってきた。

3

ふと、草薙剣の疑問が沸き起こった。やはり、決め手は、草薙剣だ。本物の草薙剣は、愛知県の熱田神宮（あつたじんぐう）に奉納されていることになっている。でも、だれも見たことがなく、本物という確証はない。単なるレプリカかもしれない。もし、熱田神宮の草薙剣がレプリカと仮定すると、本物はだれが持っているのか？ 仮に、安徳天皇が生存していたとすれば、誰かが草薙剣を預かったことになる。そして、その草薙剣は、今、だれの手にあるのか？ 第73世建内宿禰（たけのうちのすくね）と自称するタラコ先生が所持しているのか？ おそらく、本物の草薙剣が実在していたとしても、公になることはないだろう。もし、誰かがこれが本物の草薙剣だとマスコミに訴えても、公開されないだろう。それどころか、訴えた本人が、暗殺されないとも限らない。

現在の明治以降の天皇、南朝天皇、北朝天皇、安徳天皇を祖とする天皇、建内宿禰（たけのうちのすくね）を祖とする天皇。いったい、日本の天皇は何人いるのだろうか？ 日本は、天皇の国だから、今の天皇に反する天皇を主張するものは、狂人扱いされるか、暗殺されるに違いない。思うに、日本の天皇は、謎に包まれている。今の政治は、国民が選出した議員によってなされているから、天皇の存在意義はないと思われるが、一概にそうとも言えない。憲法上、天皇は国民の象徴であっても、国民への影響は総理大臣よりもある。また、国際的には、日本は天皇の国と見られている。日本文化の崩壊を予知していた三島由紀夫（みしまゆきお）が、天皇思想を持ち出し、文化防衛論なるものを叫んだが、理論に行き詰った挙句に、割腹自殺したのも無理もない。

父子 DNA 鑑定

妄想は、楽しい時もあるが、憂鬱（ゆううつ）になるときもある。天皇に関する妄想は、どちらかというと後者に当たる。それに、タケルに関する妄想ばかりでは、タケルを守ることはできない。肝心なことを忘れていた。タケルとタラコ先生の父子関係の確認だ。DNA 鑑定を一刻も早くやらねば。二人の頭髮は、ゲットできた。あとは、だれに DNA 鑑定を依頼するかだ。父親の知り合いに、T 大の医学博士がいるが、ヤバい依頼をどえらい博士に依頼できるほど度胸はない。頼みの綱は、医者卵の鳥羽君だ。彼であれば、医科大の懇意にしている教授に依頼すれば、何とかなるのではないか?? 本来であれば、糸島まで出向き、丁重に依頼すべきだが、空港でのコロナ感染を考えると気が乗らない。失礼とは思いますが、電話でお願いしてみることにしよう。

真人は、その日の午後 8 時過ぎにコールした。鳥羽は、真人がコロナに感染し、入院しているのではないかと心配していた矢先の電話だったことから、真人の元気な声を聞き、少しほっとした。真人は、ちょっと、DNA 鑑定の依頼を躊躇したが、思い切って相談してみた。「今、話しできる? ちょっと話が長くなるんだけど、いいかな〜」長話は嫌いであったが、きっとタケルの引っ越しの件だと思い、気を落ち着けて承諾の返事をした。「まあ、いいけど。タケルの件だろう?」さすが、鳥羽は直観力があると感心し、真人は、話し始めた。「話というのは、タケルと僕が知っている先生の DNA 鑑定のことなんだ。二人の DNA を鑑定したくとも、僕にはお願いする人がいないんだ。もう、察しはつくと思うけど、医者卵の鳥羽君に相談すれば、何とかなるんじゃないかと思って。お願いできないだろうか?」

鳥羽は、引っ越したタケルの搜索を依頼されると思っていたが、DNA 鑑定のお願いと知って、ちょっと困惑した。DNA 鑑定となれば、安部教授にお願いしなければならない。できないこともないと思えたが、その場合、何を目的とした DNA 鑑定依頼なのかの詳細な説明をしなくてはならない。全く赤の他人の DNA 鑑定だ。こんな興味本位の鑑定依頼を教授は引き受けてくれるとは到底考えられない。少し考え込んでしまったが、話を続けた。「DNA 鑑定か、まあ、引き受けられないこともないが、必ずできるという保証はないな。教授は、意外と気難しいんだ。でも、マヒトのお願いだし、とにかく教

授に頼んでみるよ。ところで、DNA 鑑定に使うものは、準備できてるのかい？」笑顔になった真人は、即座に返事した。「それは、抜かりないさ。タケルとタラコ先生の頭髪をこっそり頂戴してきたから。二人の頭髪を明日にでも郵送するよ」

5

鳥羽は、真人の度胸に感じ入った。「マヒト君、君もやるじゃないか。君は、そこいらの常識人だと思っていたが、いや、恐れ入ったよ。名探偵マヒトだな。早速、送ってくれ。君の心意気に応えなくっちゃな」名探偵といわれた真人は、嬉しさの興奮を抑えきれなかったが、一歩前進、一歩前進、と心をつぶやき、呼吸を整えて返事した。「ありがとう。もし、DNA 鑑定で父子が証明されたなら、21 世紀最大のスキャンダルだ。ワクワクするな～～」鳥羽は、真人の行動に不安を感じた。「マヒト君。DNA 鑑定の協力は惜しまない。でも、前にも言ったように、父子関係は、プライバシーにかかわることだ。軽はずみな言動は、禁物だ。そのことを約束してほしい。まさか、マスコミに売るようなことはしないでろうな」

マジになった顔つきの真人は、即座に返事した。「僕は、そんな、ゲスじゃないよ。心からタラコ先生を尊敬してるんだ。鑑定結果については、だれにもしゃべらない。僕の心にだけ、収めておく。二人が実の父子関係にしろ、なかろうが、大した問題ではない。でも、わがままを言うようだけど、二人の関係を確かめたいんだ。よろしく、頼むよ」鳥羽は、おそらく、鑑定は無理だと思い、再度念を押した。「教授にお願いしてみるけど、おそらく、拒絶されると思う。期待に沿えなかったとしても、悪く思わないでくれ」真人は、快く返事した。「そう、気を使わないでくれ。無理を承知でお願いしているのは、僕なんだ。鳥羽君には、感謝するよ」

鳥羽は、その返事を聞いて、少しほっとした。「とにかく、教授に頼んでみる。ところで、タラコ先生というのは、どんな方なんだい？ 面白いニックネームじゃないか」真人は、なんと返事していいか首をかしげた。「いや～～、何というか～、変人というか、後醍醐天皇の子孫というか、予備校のチョ～人気の日本史講師というか、人情味があるというか、とにかく、日本の歴史については、知らないことがない、というほどの日本史に精通した先生だ。学生からは、唇がタラコみたいだから、タラコ先生と呼ばれている」

ワハハ～～、と笑い声を響かせ、鳥羽は、タラコ唇を思い浮かべた。「タラコとは、よく言ったものだ。そのタラコ先生とタケルの顔がよく似てるというんだな。そういえば、タケルも若干タラコのような唇をしているような？ 気掛かりなのは、タケルは、福岡市に引っ越したとしても、引っ越し先を波多江先生にも教えていないことだ。タケルは、波多江先生を慕っていたから、何らかの連絡ぐらいはするはずなんだ。なんとなく、不吉な予感がする」真人も同じことを考えていた。「そうだよな。波多江先生に引っ越し先を教えないなんて、ちょっと奇妙じゃないか。僕も、なんだか、胸騒ぎがするんだ。何らかの事件に巻き込まれていなければいいんだが」

鳥羽の心に、ますます、不安が込み上げてきた。「確かに、タケルの引っ越しは、普通じゃない。僕も、できる限りの搜索をやってみる」鳥羽の心強い言葉を聞いて、少し肩の荷が下りた気分になった。「鳥羽君がそういつてくれると、心強いよ。コロナ感染が収束すれば、タケルを探しに、糸島に行くよ。あ、いけない、1時間近く、話し込んじゃった。この辺できるよ。鳥羽君、ムリなお願いを聞いてくれて、本当に、ありがとう。また、会える日を楽しみにしてる。そいじゃ」電話を切った真人は、そっと胸をなでおろした。また、鳥羽と会話できたことで、少しストレス解消になった。明日、郵送する毛髪の準備をしようと袖の引き出しを引いたとき、太宰府天満宮の参道で偶然出会ったタラコ先生の分厚くひん曲がった唇が思い浮かんだ。

去年の10月、姫島に行った翌日、タケルの安全を祈願するために太宰府天満宮に参拝に行った。前日も入ったことのある茶店の前を通り過ぎようとした時、タラコ先生とばったり出くわした。タラコ先生は、当然のことだが、こちらに目を向けることなく通り過ぎようとした。その時、つい、「タケウチ先生」と声をかけてしまった。タラコ先生は、名前を呼ばれたことにハッとされ、私に顔を向けた。私は、特段親しくもないのに、笑顔で挨拶した。「こんにちは、先生。先生のおかげで、無事、志望学部に合格できました」タラコ先生は、一面識もない予備校生でも、合格できたと報告されるとこの上ない喜びを全身で表されていた。「お～～、そうか。よかった、よかった」そう返事されると、ポンと肩をたたかれ、即座に歩き始められた。

その時、無意識に言葉を発していた。「僕、糸島の平家落人の里に行ってきました」その時、タラコ先生は、カミソリのような鋭い目つきで返事された。「ほ～～、糸島に。僕も、一度行ってみたいと思っていたんだ。糸島の話、聞きたいものだ。ちょっと、お茶でも飲んで、一服しようか」タラコ先生は、足早に茶店に入られると梅ヶ枝餅を注文された。「運良く席が空いていた。日頃の行いがいいということだ。君の専攻は？」真人は、胸を張って返事した。「文学部です」タラコ先生は、小さくうなずき返事した。「文学部か。文学が、好きということだな。自分の好きな道を進むということは、いいことだ。歴史も好きか？」真人は、小さな声で返事した。「それが、歴史が苦手なんです。記憶力が悪いもので。でも、歴史には興味はあります。歴史小説も好きです」

タラコ先生は、大きくうなずき返事した。「そうか。歴史は、実に面白い。学生は、受験のために歴史を必死になって憶えているが、大切なことは、歴史から学ぶことだ。歴史は、いろんなことを教えてくれる。大学では、自分なりに史実について考えてみるといい。意外な発見や、感動することがいっぱいあるぞ。また、歴史には、いろんな側面があって、教科書では語られていないことがたくさんある」真人は、タラコ先生の意外な一面を垣間見たような気になった。どこか、文学者に通じる考え方を持っているようだった。「憶えるのは苦手ですが、史実について考えるのは好きです。特に、権力闘争に敗れた人たちの末路について考えていると時間を忘れてしまいます」

タラコ先生は、大きくうなずき返事した。「そうだな～～。歴史は、権力闘争の連続だ。勝者が、国を支配し、文化を創造する。我々が知る歴史は、勝者が作った歴史だ。言い換えれば、我々が知らない歴史が山ほどあるということだ。私は日本史の知識は豊富だが、それは、勝者が作り上げた歴史の知識でしかない。敗者の歴史もあるのだが、それを知ることはかなり厄介だ。だが、歴史とは、そういうものだ。歴史文献は、事実ばかりとは限らない。時の権力者によって、創作されたものも少なからずある。だから、自分の頭でしっかり考えることが大切だ。なんだか、説教じみてきたな」真人は目を丸くした。タラコ先生は、歴史を疑うことを勧めている。思っていた以上に偉大な先生のように思えてきた。「はい。史実について、もっともっと考え、それを糧に、将来は、小説を書きたいと思っています」

タラコ先生は、目を輝かせて返事した。「頼もしいじゃないか。君の小説を読んでみたいものだ。頑張れ」真人は、小説を書きたい、と言って激励されたのは、生まれて初めてであった。父親からは、バカな夢はさっさと捨てろ、と中学生のころから言われていた。嬉しくなった真人は、姫島の波多江先生のことを話したくなってしまった。「先生、糸島市の姫島に行かれたこと、ございますか？ 小さな島ですが、波多江先生といわれる、チョ～～熱血先生がいらっしゃるんです。子供達にサッカーを教えておられます。是非、先生も波多江先生にお会いになられてはいかがですか？ きっと、気に入られると思います」

姫島と聞いたタラコ先生は、笑顔で目を輝かせた。「姫島だろ。知ってるさ。野村望東尼（のむらもとに）が幽閉されていた島だ。ほ～～、ハタエね～～。波多氏（はたうじ）か。糸島の離島に波多氏がいたとはな～～。平原遺跡（ひらばるいせき）に行ってみようと思っていたところだ。ついでに、ちょっと、船に揺られてみるか」タラコ先生は、時々、頭をかく癖があった。運良く、一本、頭髮がテーブルに落ちた。タラコ先生が、席を立たれると丁重に挨拶して見送った。そして、即座にテーブルに落ちていた頭髮をゲットした。タラコ先生との偶然の出会いで一步前進したような気持になったが、いったい、なぜ、タラコ先生は、福岡までやってきたのか？ ちょっと、気になった。

机の引き出しに、タラコ先生とタケルの頭髮が入った封筒が大切に保管されている。便せんに二人の名前を書き、名前の下に頭髮をテープで張り付けている。これを明日投函しよう。あとは、DNA 鑑定してくれることを祈るだけだ。タラコ先生は、今、何をやってるのだろうか？ 予備校講師はやめられたという噂だ。もしかして、ひきこもって、小説を書いたりして。でも、意外だったな～～。あの時の先生は、講師というより、小説家だった。そう、先生は、神主だった。神主の仕事が忙しいに違いない。どこの神社に行けば会えるのか？ まあ、いいや、神社巡りをやってれば、また、どこかで会えるに違いない。

手がかり

問題は、タケルのことだ。無事であれば、それに越したことはないが、なぜか、心配になる。所在を突き止める方法はないか？ 波多江先生には、きっと、何らかの連絡はあると思うのだが。それを待つしか方法はないのか？ タケルの手掛かりになるものは？ 要は、なぜ、タケル一家は、突然、引っ越ししたのか？ そうか？ 万が一、タケルの父親がタラコ先生だったとしたならば、タラコ先生が、タケル一家をどこかに避難させたとも考えられる。それでは、何のために避難させたのか？ そうだ、かつて、タラコ先生は、自分は南朝の後醍醐天皇（ごだいごてんのう）の子孫とマスコミに公言したことがあった。もし、タケルがタラコ先生の子供ならば、タケルも同じく後醍醐天皇の子孫。もしかして、そのことが原因か？

後醍醐天皇の子孫を嫌っている連中は、だれか？ 北朝だけか？ いや、今の天皇家も？ でも、後醍醐天皇の子孫だというだけで、命を狙われることはないだろう。そうか？ いまだ、壇ノ浦の海底から草薙剣が引き揚げられていないことから、熱田神宮の草薙剣は、形代だとも言っていた。これが、北朝の逆鱗に触れたのか？ 確かに、タラコ先生は、北朝に嫌われることを言っていた。さらに、令和の天皇も本物の草薙剣を持っていないということになるから、令和の天皇家にも嫌われることを言ったことになる。タラコ先生は、自分の身の危険を感じたからこそ、万が一のことを想定し、タケル一家を避難させたのか？

タケルは、所在を他言してはいけない、と親から念を押されていたとしても、波多江先生にだけには連絡を取るような気がした。今は、タケルが波多江先生に連絡するまでじっと辛抱強く待つしかないのか？ いや、そんなのんきなことを言っていていいのか？ すでに、タケル一家は拉致され、全員消されているかもしれない。でも、あまり悪い方向に考えていてばかりでは、先には進めない。今は、無事だと確信して、何らかの方法で捜索すべきだ。でも、どうやって？ そうだ、明日、波多江先生に電話してみよう。今回ばかりは、電話での失礼は許されるだろう。

6月3日（水）午前9時、DNA鑑定のための頭髪入り封筒を投函した。部屋に戻ると、軽く肩甲骨と股関節の運動をして、パソコンの前に腰掛けた。タケルを捜索するとしても、むやみやたらと駆け回っても徒労に終わる。タケルについて、見落としている点はないか？ まず、タケルについての情報をまとめてみよう。そこから、推測するのが賢明だろう。知りえている情報を列記してみることにする。①タケルの実の母親は死んでいる。②現在、亡くなった母親の妹に育てられている。③タケルの姓は、近衛（このえ）である。④タケルからの情報だが、東京から姫島にやってきた。⑤サッカー少年である。⑥波多江先生からサッカーの指導を受けていた。⑦血液型はA型。⑧生き別れの父親の姓は、タケウチ。漢字は不明。⑨福岡市に引っ越したと思われる。この程度かな～。こんな情報じゃ、どうしようもないな。

タケルのことばかりが気になっていたが、タケル自身の意思で引っ越したわけではない。両親の意向で引っ越したに過ぎない。いや、おそらく、母親の意向でタケルは引っ越したに違いない。タケルを預かったということは、妹は独り身だった可能性が高い。彼女は、未婚か？ もしくは、バツイチではないか？ タケル一家は、なぜ、雲隠れしたのか？ おそらく、誰かの指示に従ったのだろう。指示したものはだれか？ タラコ先生かも？ ということは、タラコ先生のことをもっと知る必要がある。知っていることといえば、予備校の日本史講師。神主。この程度だ。でも、タラコ先生について知ったからと言って、避難させた場所を突き止めることはできない。手ががかりなしで、どう動けばいいんだ。

その時、パッと、姫島神社の鳥居が頭に浮かんだ。初めて、タケルと出会ったのは、神社の境内だ。神様が、タケルとの出会いを作ってくれた。そうだ、神社だ。きっと、どこかの神社で再会できるに違いない。タケルは、姫島神社の近くに住んでいた。ということは、どこかの神社の近くに引っ越したと考えてもいいのではないか？ そう考えても、日本中に、神社は、8万社ほどある。気絶するほどの数だ。

そう、悲観的にならずに、考えてみよう。まず、考えられるのは、①安徳天皇の生まれ変わり。そこから考えて、下関市の赤間神宮。②本物の草薙剣を持っているということから考えて、名古屋市の熱田神宮。③後醍醐天皇より有名な楠木正成（くすのきまさしげ）が祭られている神戸市の湊川神社（みなとがわじんじゃ）④後醍醐天皇の子孫ということから考えて、後醍醐天皇が流された島根県の隠岐島（おきのしま）にある神社。⑤安徳天皇のおじいちゃんは、平清盛（たいらのきよもり）。平清盛が守護神としていた広島県の廿日市市（はつかいちし）にある厳島神社（いつくしまじんじゃ）。⑥近衛は五摂家の一つ。五摂家は藤原氏。藤原氏の氏神である春日大明神を祭っている奈良市にある春日大社。

いや〜〜。まったく、厄介だ。考えるだけで疲れてきた。神社の近くに住んでいたとしても聞き込みは、大変だ。しかも、今は、コロナ自粛で聞き込みなどもってのほか。電話帳で調べることもできなくはないが、おそらく、タケル一家の電話番号は、掲載されていないはず。掲載するほど間抜けではない。やはり、デカのように聞き込みをする以外ない。学生が、そんな真似できるかよ、といたいところだが、タケルのことは気にかかる。やはり、頼みの綱は、波多江先生からの情報だ。すぐにでも波多江先生に電話したいところだが、勤務時間はまずいと思い、午後8時以降に電話することにした。

まずは、腹ごしらえだ。ゆで卵2個とラップしていたゆでた鶏のささみをフレッジから取り出した。今年から、ゆで卵と鶏のささみを食べることにした。なぜかというところにも筋肉がないことにタケルに気づかされたからだ。昨年、タケルとサッカーをやった時、タケルの脚力には驚かされた。まったく、歯が立たなかった。そもそも、スポーツは嫌いだから、筋力がないのは承知していたが、やはり僕も男なのか、タケルに負けて恥ずかしくなった。そこで、週に3回は、走ることにした。そして、筋肉をつけるためにゆで卵と鶏のささみを食べることにした。それが、思っていた以上に効果がある。最近、ふくらはぎの筋肉が大きくなったような気がする。もし、タケルと再会したときは、タケルをびっくりさせるようなシュートを見せたいと意気込んでいる。まあ、スポーツ嫌いは相変わらずだが、タケルとの再会を楽しみに頑張るつもりだ。

8時を少し回ったころ、波多江先生にコールした。先生は、即座に応答した。「はい。波多江です」真人は恐縮した小さな声で話し始めた。「カスガマヒトです。夜分、申し訳ありません。お久しぶりです。電話では、失礼と思いましたが、お尋ねしたいことがあります。お電話いたしました。今、お時間よろしいでしょうか？」波多江先生は、突然の電話にちょっと驚いた様子だったが、タケルの件であることは即座に察知した。「タケルのことでしょ。それが、いまだ、連絡がないんです」予測はしていたが、連絡がないことを知って、言葉に詰まってしまった。「は～～、そうですか？ やはり、ありませんか。心配ですよね～～」

波多江先生もタケルのことが心配で、引っ越ししてからずっと気にかけていた。「タケルは、私の携帯番号を知っているんです。だから、連絡できるはずなんです。なのに、連絡がないということは、何らかの事情があるということです。気をもんでも、どうにもならないですし、じっと、連絡を待つ以外ありません」真人は大きくなずいた。「先生は、今も、姫島分校でいらっしゃるんですか？」波多江先生は、気まずそうに返事した。「いや、4月から、糸島市内の中学校に赴任しました。でも、搜索は続けています。福岡市に引っ越していたなら、福岡市内の中学校に通っているはずなんです。知り合いの先生を通じて、聞き込みをやっていきます」思っていた以上に、波多江先生は、やさしい方だと感じ入った。「僕は、どうすればいいか、よくわからないんです。搜索しようにも、全く手掛かりがないし。しかも、横浜にいますから」

波多江先生は、即座に返事した。「マヒトさん、タケルから連絡があれば、即座に、ご連絡いたします。心配いただき、ありがとうございます。タケル、元気で、サッカーをやっているんですけど。僕は、悪い方向には、考えたくないんです。きっと、ご両親の都合があるんだと思います。元気な声を聞けると確信しています。待てば海路の日和（ひより）あり、です」真人も悪い方向に考えなくなかった。大きくなずき、返事した。「はい、そうですよね。元気で、サッカーをやってますよね。先生の連絡を楽しみに待っています。コロナ感染が収束したならば、先生に、ご挨拶に伺います。お会いできるのを楽しみにしています」波多江先生も真人の人柄が気に入っていた。「きっと、連絡は、あります。今度、お会いできたら、糸島を案内します」真人は、お礼を言うと電話を切った。

タケルから連絡がないということは、予測していたことだったが、はっきりと知らされると気がめいてきた。今のところ、搜索の手掛かりが全くない。その上、コロナ自粛で聞き込みもできない。いったい、何から始めればいいのか？ そういえば、タケルが住んでいた家は、今、どうなっているんだろう？ 誰かが住んでいるのか？ それとも、空き家なのか？ もしかすれば、何らかの手掛かりが、家のどこかにあるかもしれない。でも、すでに誰かが住んでいるとすれば、家探しはできない。とにかく空き家かどうかの確認だ。鳥羽君に確認してもらおう。悪いとは思ったが、頭髮の郵送の報告を兼ねて、早速電話することにした。

一回のコールで反応した鳥羽は、パソコン横に置いていたスマホを左手に取った。真人は、頭を下げながら、声を発した。「鳥羽君、今いい？」鳥羽は、冷静な声で返事した。「あ～～、いいとも。今日、頭髮を郵送してくれたんだろ。5日後には、着くんじゃないか。やるだけのことは、やってみる」真人は、さらに頭をペコペコさせて話し始めた。「まことに、申し訳ない。ついだというのは、なんだけど、ちょっと、お願いがあるんだ」鳥羽は、いやな表情を作ったが、真人のお節介に感心しているところでもあった。「それで、どんな？」真人は、言いにくそうな口調で話し始めた。「お願いというのは、タケルが住んでいた家なんだけど、今、どうなっているか、知りたいんだ。鳥羽君、知ってる？」鳥羽は、即座に返事した。「いや、知らない」

真人は、正座してお願いすることにした。「鳥羽君、誠に申し訳ないんだが、今、その家がどうなっているか、調べてくれないか？」お願いすると頭をフロアにつくまで深々と下げた。お願いの意味がよくわからなかった。「どういうことだ？ 意味が分からないんだけど」真人は、自分の考えを話すことにした。「いや～～。無駄かもしれないんだけど、もし、空き家だったら、家の中を調べようと思って。何か、手掛かりがあるかも？ ヤッパ、ムダかな～～」鳥羽は、あきれた顔をしたが、真人の熱心さには恐れ入った。「ほ～～、空き家をね～。今度の日曜日に、姫島に行ってみるよ。でも、マヒト君は、マジ、探偵みたいだね～～」真人は、跳びあがってお礼を言った。「ありがとう。もし、空き家だったら、すぐに、姫島に行くよ。何か、手掛かりがあると思うんだ」

鳥羽は、これ以上お願いされては、迷惑と電話を切ることにした。「とにかく、日曜日には、確認してみる。もう、お願いは、これだけだろうね」真人は、恐縮した顔つきで返事した。「もう、これっきりだ。本当にありがとう。勉強の邪魔をして、本当に、ごめん。もう切るよ。ありがとう」真人は、鳥羽には悪いことをしたようだったが、タケルのために、できる限りのことをしてやりたかった。仮に、空き家だとして、家探しができたとしても、何の手掛かりもないかもしれない。それでも、やらないよりはやったほうが気持ちの整理がつくように思えた。

古びた空き家を思い浮かべた時、ふと、疑問が起きた。あの家の持ち主はだれだったのか？当初、亡くなった母親が空き家を買って住んでいたとする。であれば、家の所有者は、実の母親だ。その家に育ての親である妹とタケルが住んでいたとなれば、タケルを育てるという条件で、妹は、姉から無償で譲り受けた可能性がある。現在、家の所有者が、妹であれば、賃貸、もしくは売りに出されているかもしれない。それとも、そのままの状態で放置されているかも？もし、不動産会社に物件を依頼していたなら、不動産会社から、タケルの所在を知ることができるのではないか？でも、不動産会社を仲介していたとすれば、北朝の連中も同じくタケル一家の情報を不動産会社から入手できる。そう考えると、不動産会社の仲介はないと考えたほうがいい。とにかく、鳥羽君の連絡をまとう。

おばあさん曰（いわ）く

6月7日（日）鳥羽は、少し早いと思ったが、岐志（きし）魚港 11 時 50 分発の渡船”ひめしま”に間に合うように 11 時に寮を出立することにした。幸運にも窓から空を見上げると快晴であった。福岡県では、コロナも収束に近づいてはいたが、念のためにマスクをすることにした。腕時計の 11 時の表示を確認すると、ライダージャケットに腕を通し、ヘルメットを右脇に抱え、駐輪場にかけていった。鳥羽は、素早く、アドレス 110 を引き出し、長い脚を振り上げ、シートにまたがった。そして、左手でリアブレーキレバーを引き、右手の親指でスタータスイッチをプッシュした。セルの心地よいブルルル〜という音が体に伝わってきた。その瞬間、甲高い声が、鳥羽を呼び止めた。「鳥羽ク〜ン。お出かけなの？ どこ行くの？ 食事？ 食事だったら、付き合うけど」よりによってこんな時に小悪魔に絡まれるとは、ついてない、と思ったが、返事だけはすることにした。「ちょっと、用事があるんだ」

小悪魔は、追い打ちをかけてきた。「用事って？ そんなに、急ぎなの？ 美緒も手伝おうか？」そういい終えた時には、美緒の右手が鳥羽の肩にあった。鳥羽は、無駄話をしているのは、渡船の出発時刻に間に合わなくなると思い、これからのことを話すことにした。「いや、用事って、姫島に行くんだ。ちょっと、急ぐんだ。悪いな」美緒は、即座に返事した。「姫島だったら、一緒に行きたい。いいでしょ〜。デートってわけじゃないでしょ。一人でしょ。美緒、行きた〜い。行きたい、行きたい。お願い」美緒のお願いを断っていたら、出発時刻に間に合わなくなると思い、承諾してしまった。「別にいいけど」美緒は、笑顔で返事した。「そいじゃ、美緒のクロスビーに乗って」鳥羽は、原チャリを駐輪場に戻すと女子寮の駐車場に向かった。

出発前に無駄話をしたが、岐志漁港には 11 時 30 分過ぎについた。待合室に入ると、だれもいなかった。「僕たちだけか。思ったより早く到着した。美緒さんの車のおかげだ。助かったよ」美緒は、感謝されて有頂天になった。「そう、鳥羽君のお役にたてて、すっごくうれしい。これからも、遠出することがあったら、いつでも言って。美緒って、尽くすタイプだから」美緒は、人はいいんだが、なんとなく気味が悪い。悪く言うわけじゃないが、豊富な男経験からくる異様な馴れ馴れしさに虫々が走る。時々、平然と男心をくすぐるようなことを口走る。用心。用心。

鳥羽は、美緒の横顔を覗き見た。「今日は、予定があったんじゃないのか。悪いな～～。付き合わせて」美緒は、目を丸くして、鳥羽を見つめた。「とんでもない。今、彼氏いないんだから。わかってるくせに。男友達は、鳥羽君だけよ。なんだか、こうやって鳥羽君の隣に座っていると・・・」美緒は、うふふと小さな笑い声をあげた。鳥羽は、腕時計に目をやり、出発時刻の5分前に立ち上がった。「さ、行こうか」美緒も立ち上がり、二人は渡船場に向かった。二人は、行きの乗船券を船長に渡すと美緒を窓際の席に、鳥羽は通路側に腰掛けた。渡船”ひめしま”は、小さな波にゆっくりと揺れていた。「美緒さん、姫島は初めて？」美緒は、窓から海を見つめながら返事した。「初めて。船も、子供のころ、呼子の遊覧船に乗って以来。船酔いしなければ、いいんだけど」

乗船時間は、16分だから、酔わないとは思ったが、酔わない方法を教えた。「16分の辛抱だ。気持ち悪くなってきたら、舟の動きに合わせて、体を動かせばいい。そして、大きく深呼吸するんだ」美緒は、エンジンの振動が気になったが、なるべく外の景色を眺めて、何も考えないことにした。美緒は、ぼんやりとピカピカと輝く海を眺めていた。少し気分が落ち着くとおしゃべりをしたくなった。「そういえば、用事があるんだよね。どんな用事なの？」鳥羽は、ちょっと説明しづらかったが、沈黙するわけにもいかず、それかと言って、話せないとも言えなかった。この件は、話しても特に問題ないように思え、話すことにした。「用事というのは、マヒト君にお願いされたことなんだ」美緒は、即座に返事した。「あ～～、あのときの青白い顔のマヒト君ね」

鳥羽は、話を続けた。「先日、マヒト君から電話があって、タケルが住んでいた家を見てきてほしいといわれたんだ。実は、タケルは、昨年、福岡市に引っ越して、その後、音沙汰がないんだ。ちょっと気になるから、その家が、今、どうなっているか、見てきてほしいと頼まれたんだ。それで、今から、見に行くってわけ」美緒は、「まむしの湯」のレストランでの話を思い出していた。「サッカー少年のタケル君ね。そう～、安徳天皇の生まれ変わりとか言ってたわよね。へ～～、福岡市に引っ越したの」鳥羽は、首をかしげて返事した。「そうなんだ。でも、その後、タケルとは、まったく、連絡がつかないんだ。それで、マヒト君は、心配になって・・・」美緒も目じりを下げて安否を気遣うように小さな声で返事した。「そうなの。それは、心配ね。タケル君、本当に、天皇の子孫かもね。災いが、降りかからなければいいけど」鳥羽も大きくうなずいた。「音信不通だろ、ちょっと、気にかかるんだ。無事でいてくれることを願うしかないんだけど」

話に夢中になっていると姫島港に到着していた。「もう、ついちゃったの。あつという
間ね。酔わなくてよかった」鳥羽も美緒の元気な顔を見て、笑顔を作った。「タケルの家
は、姫島神社の近くなんだ。港から西に歩いていけば、すぐにつく」美緒は、小さな階
段を上り甲板に出た。少し船が揺れふらついた。とっさに鳥羽は、美緒の左腕を取って、
体を支えた。美緒は、ニコッと笑顔を作り、ゆっくりと下船した。「こっちの方向だ」と
言って、鳥羽は西に向かって海岸沿いの小道を歩き出した。美緒は、鳥羽の右側を歩き
始めた。「なんだか、さみしい島ね。タケル君の気持ちわかるわ」鳥羽は、尋ねた。「どう
いうこと？」美緒は、呆れた顔で、即座に返事した。「当然、じゃない。こんなさみしい
とこ、住めないわよ。私だったら、3日いたら、引っ越したくなる。なんだか怖くなって
きた」

姫島育ちの鳥羽は、そこまでさみしいとは思わなかった。でも、若い人は姫島にやっ
てこない。ますます、人口は減っている。美緒の感想は、もっともだった。「やっぱ、さ
みしいよな～～。遊ぶところもないし、子供はいないし。全く、何にもない。あるのは、
漁船だけか」美緒は、鳥羽が姫島育ちであることを思い出した。ハッとした美緒は、明る
い声で話し始めた。「でも、空気はいいし、健康にはいいわよね。ア、かわいいネコちゃ
ん。ほら、あそこにも、こっちにも」鳥羽は、笑顔で返事した。「この島は、ネコには、
楽園なんだ。みんな、ネコをかわいがるんだ。魚は、食べ放題だし。西側の岸边にもた
くさんいるよ」美緒は、玄関先で寝転がっている三毛猫に近づいた。

猫たちは、エサをくれると勘違いして、美緒に近づいてきた。「あら、ネコちゃんたち、
集まってきた。え～～、マジ、すごい。ネコ島じゃん」鳥羽は、ワハハと笑い声をあげ
た。「いったら。ここは、ネコの楽園なんだ。人より、ネコのほうが多いんだ。姫島神
社は、すぐそこ」鳥羽は、美緒をおいて歩き出した。置いてきぼりにされた美緒は、鳥
羽を追いかけた。「待ってよ、鳥羽ク～～ン。せっかちなんだから」鳥羽は、小さな路地
を右に折れた。古びた家の前に立つと表札を確認した。まだ、表札には、近衛（このえ）
の表記があった。開き戸に手をかけ、力を入れてみた。ガラガラとドアが開いた。鳥羽
は、タケルとサッカーをしたときのことを思い出した。あの時も、タケルはドアに鍵を
かけずに飛び出していった。

ハ～ハ～息を切らしてやってきた美緒が、中を覗き込んだ。「だれも住んでいないみたい。でも、表札は、あるじゃない。ってことは、戻ってくるってこと？」鳥羽は、首をかき上げて返事した。「どうなんだろう～。引っ越したのは、間違いない。確かに、人が住んでる気配は、ないな～。でも、いずれ戻ってくるのかもしれないね。でも、空き家にしてると、物騒じゃないか。そうだ、隣のおばあさんに、ちょっと聞いてみよう」鳥羽は、隣の家に向かった。インターホンがないため、大きな声で叫んだ。「ごめんください。ごめんください。ちょっと、お尋ねしたいんですが」すると、中からおばあさんの声が返ってきた。「はい。はい。そう、そうおらばんでも、すぐ行くから」

ガラガラとドアが開くと70代半ばとみられるおばあさんが顔を出した。「まったく、うるさか～。そんなに、おらばんでも、聞こえちよる。耳は遠くなか。なんね、ニィ～ちゃん」鳥羽は、頭をかきながら返事した。「大きな声を出して、すみません。お隣のことでお聞きしたいんです」おばあさんは、じろっと鳥羽を見つめて返事した。「この前も、色白のニィ～ちゃんが、同じこと聞きよった。隣は、引っ越したばい。今は、だれも、住んどらん。なんか、用ね」鳥羽は、ちょっと言葉に詰まったが、話をつないだ。「用事って、ほどのことはないんですが、ここに住んでいたタケル君と友達なんです。でも、連絡が取れないもので。知っておられたら、教えていただきたいと思ひまして」

またもや、じろっと鳥羽を見つめたおばあさんは、怪訝そうな顔つきで返事した。「あのときのニィ～ちゃんと同じこと聞くね～。あんたも、タケルの友達ね。タケルは、あいらしかった。タケルが、おらんくなって、さみしか～。そう、立ち話しも、なんやけん、うちに、はいりんしゃい」二人は、ちょっと薄暗い土間に入っていった。「ここに、座りんしゃい」小さな声を残して、腰を曲げたおばあさんは、奥に引っ込んだ。二人は、遠慮がちに、上（あ）がり框（かまち）に並んで腰かけた。しばらくすると、静かにお茶を運んできた。おばあさんは、正座して話し始めた。「タケルは、いい子やった。明るくて、サッカー、バッカ、やとった。いったい、どうしたんやろ。突然、去年の夏休みに、引っ越してしもうた。挨拶もせんと、おらんくなったとばい。まあ、しょうがなか。若いもんは、みんな、島ば、出ていく。ここには、ジジババしかおらん」

鳥羽は、家の様子を聞くことにした。「家は、空けっぱなしですが、いいんですか？ 泥

棒が入りませんか？」呆れた顔のおばあさんが、返事した。「なんが、どろぼうね。島には、泥棒も強盗もおらん。家には、なんもなか。なんば、ぬすむとね。時々、家ん中ば、のぞくとよ。タケルが、もどっちよらんか。いつ帰ってきてもよかごと、そうじ、しよつとばい。そう、タケルの父ちゃんは、福岡市におるといっとった。きっと、今は、父ちゃんと一緒に、くらしとるとよ。それが、よか。親子は、一緒に暮らすのが、一番たい。よかよか、それがよか」鳥羽にとっては、べらべらしゃべるおばあさんで、都合がよかった。鳥羽は、福岡市を頭にメモした。「そうですか、今は、コロナで外出自粛ですが、収束したら、きっと、おばあさんに会いにやってきますよ」

おばあさんは、小さくうなずき返事した。「ほんと、タケルが、おらんくなって、さみしか〜。孫みたいやったから。はよ、会いたか〜」鳥羽は、おばあさんと話しているところを思い出した。「僕は、姫島育ちなんです。中学までいました。ヤッパ、姫島はいいですね。一月に、一回は、分校の先生に会いに来るんです。いい先生に恵まれて、幸せでした」おばあさんの顔が、パツと明るくなった。「そう、どこかで見たような、気がしとった。そう、やったね」鳥羽は、話を続けた。「今は、学生ですが、将来は、戻ってこようと思っています。それまで、元気でいてください」おばあさんは、大きくうなずき返事した。「ありがとね。若か人が、戻ってきてくれると、うれしか〜。ここで、ようけ、子供作りんしゃい」

長居しては申し訳ないと思い、鳥羽が、腰を上げようとした時、おばあさんが、話し始めた。「姫島で、デートね。そこの民宿に泊まりんしゃい。あんた、健康そうじゃなかね。ようけ、子供産めるばい」鳥羽は、誤解されて、即座に否定した。「いや、デートじゃありません。彼女は、友達です。先生に挨拶したら、すぐに帰ります」美緒が、間髪入れず、話し始めた。「私、姫島は、初めてなんです。でも、猫がたくさんいて、とても素敵。彼は、医者のお卵なんです。将来、ここに診療所を建てるといっています。すごく、頼もしいんです。私も、彼のお手伝いをしようと頑張ってます。本当に、いい島ですね」余計なことを言っただけだと思ったが、後の祭りだった。「そうじゃったね。ニィ〜ちゃん、医者のお卵ね。こんな島に診療所ば。あんたは、看護師さん。ありがたか〜。長生きせんば」

20

気まづくなった鳥羽は、お礼を言って帰ることにした。「お話、ありがとうございました。一月に一回は、姫島に来ますから、こちらにも寄ります。タケルも、きっと遊びにやってくると思います。お元気で」おばあさんは、浅黒い両手を合わせて、頭を下げた。

「ありがとよ。ありがとよ。あんたも、おいで。待ちよるからね」おばあさんは、二人を玄関先まで見送ってくれた。二人が、振り返ると手を小さく振っていた。おばあさんのさみしさが、ずしんと伝わってきた。確認できたことは、タケルの家は、空き家だった。しかも、今でも、近衛の表札がかけられていた。また、タケルは、父親と同居するために、福岡市に引っ越したのではないかとおばあさんは言っていた。これらの情報は、真人に伝えてやろう。

なぜか、美緒の機嫌がすこぶる良くなった。生まれ故郷が嫌われるより、気に入ってくれた方が、嬉しかったが、また一緒に来たいと言い出すのではないかと思うと落ち着かなくなった。「やっぱ、空き家だった。でも、お父さんと同居しているかもしれないし、そう、心配することもなさそうだ。マヒト君も安心するだろう」美緒は、浮かれた気分で話し始めた。「来てよかったわ。鳥羽君の生まれ故郷って、ステキ。すっごく、気に入っちゃった。これから、先生のところに行くの？」波多江先生は、4月に糸島市内の中学校に赴任したのを知っていたが、美緒に知らせることでもないと思い、そのことには触れなかった。「いや、今日は、タケルの家を見に来ただけだ。ちょっと、散策して、14時20分発で帰る」美緒は、グ〜となるお腹を押さえて、うなずいた。

美緒は、道沿いのお店に目をやった。「ここ、レストランなの？」鳥羽は、顔をしかめて返事した。「いや、単なる雑貨屋なんだ。島には、食事するお店がないんだ。観光客が、わんさか来るほどの観光地じゃないからな。途中で、コンビニに寄ったのは、パンとお茶を買うためさ。おなかすいただろ。今日は、パンで我慢してくれ」美緒は、ホッとした顔で返事した。「おなかすいちゃった。あっちの海岸で食べましょ」美緒は、西側の海岸に向かって短い脚をスキップさせた。美緒は、浜辺の岩場を覗き込むとキャ〜と大声を上げた。「こんなにたくさん、ネコ、ネコ、ネコ。ほんと、この島って、ネコの楽園ね」鳥羽は、ワハハと笑い声をあげ、浜辺まで降りると腰掛けるのに手ごろな岩場を探した。「ここにしよう。美緒さん、おいでよ」美緒は手を振って、大きな声で返事した。「ハ〜〜イ、ダ〜リ〜ン」

21

口は災（わざわ）いの元

その夜、鳥羽は、タケルの家の状況を報告することにした。真人は、首をキリンさんにして待ってるに違いないと午後7時過ぎにコールした。待機してたかのように一発目の

コールで応答があった。「はい。どうだった？」鳥羽は、真人のせっかちにびっくりした。いつも冷静な性格だと思っていたが、それは、勘違いだった。「ちゃんと、姫島に行ってきたよ。ちょっと、話が長くなるけど、今いい？」真人は、背筋を伸ばして、返事した。「はい。どうぞ」鳥羽は、なるべく、簡潔に話すことにした。「まず、タケルの家の状況だけど、空き家だった。でも、近衛の表札は、今も、かけられてあった」真人は、うなずいた。「表札がまだあるということは、まだ、売りには、出されてはないということかな？」

鳥羽は、話を続けた。「今のところ、賃貸でも、売りでも、ないな。不動産屋の看板がなかったし。そう、なぜか、ドアには、鍵がかかっていなかった。おばあさん曰く、島には、泥棒も強盗もないということだ。確かに、僕がいた時にも、全く、強盗事件がなかったからな。それと、あくまでも、おばあさんの話だが、タケルのお父さんは、福岡市にいるそうだ。タケルは、姫島で別居生活をしていたことになる。タケルが引っ越したのは、お父さんと同居するためではないか？ というのだ。まあ、こんなところだ。カギは、かかっていないから、家の中に入ることはできる。おばあさんには、挨拶しておいたほうがいいと思うが。泥棒と勘違いされたら、大変だからな」

真人は、おおきくうなずき、マジな顔つきになった。「わざわざ、姫島まで足を運んでくれてありがとう。とにかく、一度、空き家を見してみる。何か手掛かりがあるといいんだけど。本当にありがとう。この御礼は、必ずする」鳥羽は、DNA 鑑定の件を話すことにした。「それと、DNA 鑑定の件だが、この際、はっきり言うよ。期待を持たせても、結果は同じだから。悪く思わないでくれ。DNA 鑑定は、できない。できるだけことはやるといっておいて、こんなことを言うのは、本当に、申し訳ないが、ムリなものは、やはりムリなんだ。父親の鑑定依頼申請書があれば、どうにかなるんだが」

22

真人は、一瞬息が詰まった。やはり、と思ったが、DNA 鑑定に、かすかな望みを持っていた。「そうか、やはり無理か。そうだよな、第三者が、悪用するってことも考えられるからな。当然といえば、当然か。悪かったな、バカなお願いして。その件は、きっぱり、忘れてくれ」鳥羽は、すでに郵送された毛髪の処理を尋ねた。「それじゃ、明日にでも

到着すると思うのだが、鑑定用の毛髪は、どうしようか？」真人は、即座に、返事した。「悪いけど、開封せず、捨ててもらっていいよ。他人が見たとしても、単なる毛髪だし、個人を特定できる情報は書いてない」鳥羽は、うなずき返事した。「わかった。こっちで、処分しておく。まあ、タケルのことは、あまり心配しなくていいんじゃないか。きっと、姫島がイヤになって、福岡市内に引っ越したに違いない。そんな、ところだよ」

真人もそういわれると、なんとなく納得してしまった。「そうだな、きっと、元気にサッカーをやっているような気がする。本当に、ありがとう。コロナが、収束したら、お礼に行くよ」そう返事したものの、後醍醐天皇の子孫と考えると、やはり、気にかかった。真人は、電話が切れるとぼんやりと考え込んだ。期待していたDNA鑑定が、水の泡になってしまった。でも、二人のタラコ唇は、親子の証と思えてならなかった。鳥羽君の話では、タケルは父親が住む福岡市に引っ越したのではないかとのことだった。もし、そうであれば、電話帳から近衛の住所を拾い上げ、片っ端から聞き込みをすれば、タケルを見つけ出すことができるかもしれない。でも、今すぐにはできない。それをやるにも、コロナ収束後だ。

今は、身動きが取れない。でも、やれることはまだあるはず。とにかく、頭を使え。もっと、冷静にならねば。タケルが後醍醐天皇の子孫だとしても、タケルが天皇になれる可能性は、全くない。天皇の血筋は、すでに決定されている。ならば、北朝は、特段、タケルを恐れることはない。ただ、やはり、北朝を正当化するためには、本物の草薙剣は不可欠。そうか？ タラコ先生は、本物の草薙剣を持っていると公言した。それを信じた北朝は、本物の草薙剣を手に入れようと躍起になる。ちょっと待て、本物の草薙剣を欲しがっているのは、北朝と決めつけていたが、それ以外にもいると考えてもいいのではないか？

23

もし、本物の草薙剣を手に入れることができれば、おそらく、かなりの高額で売れるに違いない。買い手は、日本政府だけじゃない、欧米の金持ち連中たちだって、きっと欲しがると違いない。となれば、本物の草薙剣を手に入れたい連中は、広範囲にわたる。悪徳商人だけでなく、日本のヤクザや欧米のマフィアも、触手を伸ばすことは十分に考

えられる。そう考えると、ヤツラが、本物の草薙剣を手に入れるために、タケルを誘拐し、そして、タラコ先生を脅迫し、本物の草薙剣を手に入れようとする事だって、考えられる。タラコ先生は、本物の草薙剣を持っているといった後、冗談だと笑っていたが、後醍醐天皇の子孫であることを考えれば、真に受けた連中がいてもおかしくない。

万が一、この不吉な妄想が、的を射ていたならば、タラコ先生もタケルも、とても危険な状況にあることになる。もはや、僕がどうにかできるようなことではない。すでに、タケルは誘拐されて、本物の草薙剣をよこせ、とタラコ先生は脅迫されているかもしれない。単なる妄想であってほしいが、現実かもしれない。そうだったら、どうすればいいんだ。警察に捜索願を出すべきか？ いや、これはよくない。警察に知らせたとヤツラは激怒し、逆に、タラコ先生とタケルは消される可能性がある。それでは、どうすればいい？ 全く、不吉な妄想が頭に浮かんだものだ。バカ、バカ、バカ、ア～～頭が割れそうだ。

待て待て、三島は、日本を代表する小説家になって、発狂した。俺は、小説家にもなっていない。この程度の妄想で発狂してどうする。もうちょっと冷静になれ。もう一度、順追って考えよう。源平合戦の時、平宗盛（たいらのむねもり）、安徳天皇の祖母にあたる二位尼（にいのあま）、それと、平家一門とともに、満6歳の幼い安徳天皇は、三種の神器を持って逃避行した。そこでだ、この三種の神器は本物だったかどうかだが？ まず、本物のとして考えてみる。

24

①草薙剣を携帯した二位尼に抱かれた安徳天皇は、壇ノ浦に入水して、死んだかどうか？ 通説通り、死んだとしよう。今のところ、草薙剣が引き揚げられたという記録がないから、海底に沈んでいることになる。言い換えれば、本物の草薙剣は、今でも、海底にあるということだ。ならば、熱田神宮に奉納されている草薙剣は形代（かたしろ）と

いうことになる。

②安徳天皇の入水は、生存をカモフラージュするためのお話で、実は、安徳天皇が生き延びていたならどうなるか？ 当然、三種の神器を携えて逃避行したと考えられるから、今ある、三種の神器は形代ということになる。であれば、当然、熱田神宮の草薙剣は、形代ということになる。でも、生存説は、一般的に認められていないようだ。

いずれにしろ、だれも、草薙剣の本物を特定できない、ということだ。所在がはっきりしない、ということは、①いまだ、海底のどこかにある。②誰かが、密かに、所持している。③誰かが所持していたが、紛失してしまった。この3通りだ。だからこそ、草薙剣に関しては、重大な問題となっている。そう考えれば、冗談で、本物の草薙剣を持っているといっても、狂人扱いはされない。ましてや、後醍醐天皇の子孫であるタラコ先生が言ったならば、真に受ける人がいても、全然、不自然でない。世の中には、金儲けを度外視して、本物の草薙剣を探している変人がいるに違いない。金儲けをもくろんで探している悪徳商人であれば、ヤクザを使ってでも、手に入れようとするかもしれない。

いえることは、冗談でも、タラコ先生は、本物の草薙剣を持っているなどというべきではなかった。口は災いの元、とはよく言ったものだ。この冗談が、本当に災いを起こしたのか？ それとも冗談で消え去ったのか？ いずれにしろ、タラコ先生の冗談が、不吉な妄想を沸き起こし、僕を苦しめる結果となった。不吉な妄想を払しょくするには、タケルの元気な姿を確認する以外ない。でも、新型コロナが収束するまで、身動きができない。そんな、のんきなことを言っていていいのか？ 一刻を争うかもしれない。6月中に、姫島に行くべきか？ 空き家に、何か、手掛かりがあるかも？ いや、いや、急（せ）いては事を仕損（しそん）じる、というではないか。

25

嘘（うそ）も方便（ほうべん）

6月8日（月）鳥羽のもとに真人からの郵便物が届いた。封筒を机の上に置き、しばらく考えた。即座に処分すべきか？ それとも、一度開封し、中身を確認したうえで、それから処分すべきか？ 即座に、処分しようと一度は決めたものの、なんとなく、どんな毛

髪が入っているか見てみたくなった。一度見て、処分することにした。ハサミで封を切ると、中には、折りたたまれた便せんが入っていた。そっと引き出すとタケル先生とタケルと書かれた氏名の下に、それぞれ一本の毛髪がテープで張り付けられていた。鳥羽は、毛髪をしばらく見つめていた。二人は、父子なのか？ DNA 鑑定をやらなければわからない。真人には、すでに、DNA 鑑定はできないことを伝えた。もはや、DNA 鑑定の必要はない。

鳥羽は、DNA 鑑定に興味をわいてきた。万が一、DNA 鑑定ができたとしても、もはや、真人には伝える必要はない。というより、伝えるべきではない。もし、伝えれば、真人に災難が降りかかるような不吉な予感がしたからだ。DNA 鑑定を教授に依頼するとして、何とていば、依頼を引き受けてくれるだろうか。当然、真人からの依頼だといえ、即座に断られる。では何とていばいいか？ タケルは、僕の友達で、タケル本人からの依頼といえどどうか？ 嘘も方便というではないか。一か八か、ダメもとて、嘘をついてみるか。意外と、子供のお願ひならば、うまくいくような気がしてきた。明日、教授に話してみよう。

6月9日（火）午後6時。鳥羽は、教授の研究室に入った。教授のデスクの前に立つと、神社で神様をお願いするように、一礼して、心からお願いを始めた。「お願いがあるのですが、聞いていただけますか？」教授は、お願いと聞いて、怪訝な顔をした。いまだかつて、学生からお願いされたことは、一度もなかった。「お願い。いったいなんだ。手短にな！」鳥羽は、少し間をおいて、話し始めた。「お願いというのは、DNA 鑑定に関することなんです。DNA 鑑定は、この大学でも、できるものなのではないでしょうか？」教授は、いったい何を言いたいのだろうか？と鳥羽の顔を覗き見た。「当然できるさ。法医学にでも、興味をわいたっていいのか？」法医学と聞いた瞬間、鳥羽の頭に、「ドラマ”科捜研の女”の沢口靖子の顔が浮かんだ。「ドラマで科捜研が、犯人を割り出すときに、DNA 鑑定をやりますよね。精子とか？ 毛髪とか？ 皮膚とか？ 使って」

26

教授は、ドラマの話と勘違いした。「あ～～、ドラマの話か。確かに、有罪判決後に、DNA 鑑定で冤罪（えんざい）となった例がある。医学の貢献だな」鳥羽は、うなずき話を続けた。「父子関係も DNA 鑑定で分かりますよね。もし、依頼があれば、やってもらえるものではないでしょうか？」教授は、首をかしげた。「依頼はないはずだが。この大学では、

鑑定依頼を引き受ける契約はしていない」鳥羽は、ちょっと、顔をしかめた。「そうですか？ でも、鑑定はできるんですよね。実を言うと、依頼があるんです。特別に、ということ、できませんか？」教授は、鳥羽の懇願する表情に疑問を感じた。「特別に？ いったいどういうことだ？ 父子DNA鑑定には、専門機関がある。当然有料だが。依頼の相談があったのなら、そう伝えるがいい」

鳥羽は、しばらく黙って思案した。有料の専門機関がるのは知っていたが、当然のことだが、第三者はできない規定になっている。どんな嘘が効果的か？ 両手を握りしめた。情に訴えるしかない、と思ひ話を続けた。「そうなのですが、依頼者というのが、中学生なんです。本当の父親かどうか知りたいと相談を受けたんです。専門機関を紹介しようかと思ったのですが、有料だし、父親に内緒でやりたいというんです。それで、できるものなら、ここでやっていただけたらと、思いまして、ムリでしょうか？」教授は、即座に、無理といいかけたが、一応事情だけは聴いてみることにした。「その中学生というのは、君の友達なのか？ 確かに、実の子供かどうか？ の父親からの依頼はよくあることだ。子供からの依頼か？ どういうことだ？」認知のために、父子DNA鑑定は、よく聞く。どういえばいいか、首をかしげた。

鳥羽は、思い切ったドラマを作ることにした。「はい、タケルは姫島の子で、母子家庭です。母親というのは、育ての親で、実の母親は、亡くなっています。最近、育ての親に、先月、実の父親を紹介されたのですが、生後すぐに、生き別れとなり、実の父親の顔を全く知りません。だから、タケルは、本当に、実の父親かどうかを知りたい、というんです。できれば、願いをかなえてあげたいと思ひまして」鳥羽は、頭を下げた。教授は、子供の気持ちはもっともだ、と思えた。だが、鑑定結果が、不幸をもたらす場合もある。腕組みをした教授は、ゆっくりと話し始めた。「タケル君の気持ちは、よくわかる。だが、鑑定結果が、必ずしも、幸福をもたらすとは限らない。万が一、実の父親でないという鑑定結果が出たら、大問題となる。やはり、ここでは、鑑定できない」

27

鳥羽は、浅はかだったことに、ハッとした。そこまで考えていなかった。鑑定は無理といわれた。ドラマは、ここまでか、とそう思った時、口は動いていた。「教授、ご心配なさらないでください。万が一、実の父親でないと鑑定結果が出た場合、タケルには、結果を知らせません。育ての親は、何らかの理由で、実の父親といったわけです。こちらが、立ち入ることではないと思います。鑑定結果が、実の父親であった場合のみ、タケルに結果を知らせます。どうでしょう、勝手なお願いですが、やはり、ムリでしょうか？」

教授は、目を閉じて、しばらく沈黙した。子供の気持ちを考えると父子鑑定をやってあげたい。でも、仮に、実の父親でないと結果が出た場合、絶対に他言はできない。きっと、大問題となり、鑑定の出所が表に出てしまう。これは、まずい。

のけぞり、ギョロ目で天井を見つめた教授は、う～～と大きなため息を漏らした。「タケル君の気持ちは、よくわかる。実の父親であることが、はっきりすれば、きっと、心は晴れるだろう。鳥羽が、そこまで言うのなら、鳥羽を信用して、やってあげるか！」鳥羽は、目を輝かせ、お礼を言った。「ありがとうございます。約束は、必ず守ります。鑑定のための毛髪は、用意してます」鳥羽は、封筒を差し出した。教授は、受け取ると小さくうなずいた。「おそらく、5日後には、鑑定結果が出るだろう。約束は、必ず守るように。何らかの問題が起きたなら、全責任を負ってもらおう。即刻、退学だ、いいな」一瞬鳥羽の顔が引きつったが、大きくうなずいた。「はい。教授に迷惑がかかるようなことは、一切いたしません。よろしくお願いします」

依頼できたことはうれしかったが、結果を知ってしまった後の自分のことを考えると不安が込み上げてきた。実の父子でなければ、特段、問題はない。問題は、逆に、実の父子と鑑定結果が出た場合だ。東京にいる予備校講師の実の子供が、片田舎の福岡に住んでいる。しかも、タケルは、赤ちゃんの時に、生き別れになったとっている。いったい、どういうことだ。何か、深い事情があるに違いない。真人に知らせるべきだろうか？いや、この事実を知れば、きっと、真人に不幸が降りかかるような不吉な予感がする。

28

6月15日（月）鳥羽は、教授に呼ばれた。鳥羽は、鑑定結果報告だと直感した。教授室をコン、コンと軽くノックした。中から返事があった。「どうぞ」ドアを開けると一礼した。ゆっくりと教授のデスクに向かった。「座るがいい」教授は、中央のソファを指さした。ソファの横で立ち止まり、教授がやってくるのを待った。教授が、腰掛けると少し斜め向かいに腰掛けた。教授は、一呼吸して話し始めた。「結果が出た。タケル君にとって、喜ばしい結果だ」鳥羽は、うなずいた。だが、笑顔は出なかった。教授は、話を続けた。「鑑定結果は、実の父子だ。ホッとした。こんなに、緊張したのは、初めてだ」

鳥羽は、頭を下げて、お礼を言った。「本当に、ありがとうございます。タケルも、安心して、お父さんと呼べることでしょう」教授は、ホッとした表情で立ち上がった。鳥羽は、深々とお辞儀して、教授室を出た。

実の父子という事実は、鳥羽の心に重くのしかかってきた。実のところ、心では、タラコ先生は、赤の他人であってくれ、と祈っていた。だが、今、実の父子という事実を知ってしまった。これから、どうすべきなのか？ 鳥羽は、後悔し始めた。父子鑑定を依頼すべきではなかったのではないか？ もはや、後の祭りだ。タケルは、タラコ先生の実の子だ。そうだ、彼は、後醍醐天皇の子孫とも言っていた。どんな事情があって、父と子が、離れ離れになったかは、知るすべもないが、タケルの将来が気にかかる。いや、真人も心配だ。真人の好奇心は、ちょっと、危険だ。深入りしないように、忠告しなければ。そうだ、タケルを探し出して、安心させてあげるのが一番だ。近衛姓は、五摂家の一つ。全国でも、少ないはず。福岡市であれば、数えるほどだろう。近衛姓を片っ端からあたってみよう。

タラコ唇

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
